

屍ノ精神～Grave to the none～

サナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「私はきつと、狂っていたのだろう」

望まれはせず、称えられもせず、嗤われることすらない。

嫌われもしなければ、拒絶されることも、蝕まれることも。

その精神は光を失っていたのだろう。

やがて降りる悪意に、男は瞳を開くのだろうか。

覺

目次

覚

怖い、見ているモノ全てが私を呪いまくし立てる。

魚からトカゲ、虫に猿そして人。全てが全て私に語るのは「生まれ
てくるな」。

そうだね、私が生まれれば、貴方達は悲しみ苦しむよね。みんな自
分が苦しむ事を嫌うから私を拒絶するんだ。

果ての見えない暗闇の底に、光が開いた。恐怖で心が落ち着かな
い、いや・・・

嫌だ

嫌だ！

嫌だ!!

私を生まないで!!!

「大丈夫か？」

「あ、れ？おとうさん…？」

オレンジ色の淡い光が私を出迎える、横に顔を動かすとお父さんが
何時も通り、頭をボリボリしながら本を読んでいる。

「だいぶうなされてたぞ、全く風邪なんだから雪だからと、はしやぐの
はな関心しない。」

「そういえば…あはは。」

「あはは、じゃない！面倒見るこっちの身にもなってくれ!!」

額に手を当てて喚く、お父さん。怒る時に、読んでいた本に直ぐ様
しおりを取り出して、挟むのだけは凄く速い。

あ、お粥が置いてある。湯気が立ってて美味しそう。

「とにかくマスクを戻せ。食べたいのは分かったから。俺に風邪が移
る。」

「お父さん風邪引かないじゃん、大丈夫だよー。」

「じゃあこうしよう、お前のアホウイルスが俺に移るってことに。」

「ひ、ひどい!?実の可愛げな娘にアホとつケホツ!」

「言わんこつちやない、とにかく風邪のまま外に出るなよ?」

「ふぁーい…」

あー、ちよつと頭が重くなってきた。

冷めない内に食べて、大人しく寝ておこう：

「…おや、何処かへお出かけですか？あいろ先生。」

…寝かしつけたのか、大柄のサトリが階段を降りてくる。

如何にも疲れた表情をしているのは、お嬢さんに抵抗されたか否か

：

「先生呼びは止めろと言ったろシヨウタ。そもそもお前さんが、こいしを止めていたら悪化しなかつたんだぞ。」

「あ…失礼致しました。しかして、あいろ先生、私の名前は下のではなく、苗字でお呼びをと申しておりましたが…」

「分かった分かった、んじやワカバヤシ。出かけるから、こいしがまた外に出ようとしたら全力阻止だぞ？」

「ええ、ええ…存じておりますとも…。無事なお帰りをお待ちしております…あいろ殿…」

…大柄のサトリ、あいろ先生は別居中の、みつめ様とさとり様に寄りかかると話し合いへと向かう…

さして数刻も経たぬ内に、上から念を唱えんが如く、お嬢さんの言葉が淡々と落ちてくる。

「……始まりましたか…」

…階段を上げれば、その念は音を張り上げる。さも淡々と、けれど麗しさを孕んだその声は、強く強く私の耳を通りゆく…

「りーぐす…こるらていあ…あざぶはあおきからさんさんに、あんびあーはみおろしせいをみさだめる…」

お嬢さんは、お粥を食した後寝静まっていたのだろう…然しお嬢さんはココロをハイジャックされたように淡々と、強く強く念を唱える…

「……これで拾八度目、ヤハリあなたは彼の地を夢見ておらつしやる。…おちついて……思考を保ちなさい。けして自我を手放さぬよう…」

「きたるはろんこーすと…しんこくはやがてまくをおろし、きたるはゆる…しかしてそれはこころをゆさぶるさだめ…」

「落ち着いて…おちついて…、あなたは正しい。思考を保ちなさい。けして自我を手放さぬよう、それがあなたを導く灯火となりますから…」

「…おそらく、そう遠くはない。彼等が参る、物語が始まる、私も成すべき事を成さなければ…」

「ぜうす…それは…はじまりをよび、おわりをつげるしんわなり…」

物語（せかい）は現実（ホンモノ）になる